

AFCフォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

6

2016

特集 農業の発進！東京五輪へ



農業の発進! 東京五輪へ

3 日本農業と和食を海外市場に結び付ける

中嶋 康博

農林水産物輸出、インバウンド消費増加の機運がオールジャパンで高まっている。東京五輪はその好機で関係者が連携して対応することが必要だ

7 農業者、地方自治体が動く世界市場戦略

窪田 新之助

地方の魅力や日本食を核にした訪日外国人の誘客産業を興せるかは、地方創生の一つの鍵だ。五輪開催を契機ととらえ取り組む事例を紹介する

11 メダル獲得には食材の力が効果的になる

石川 三知

トップアスリートの栄養のサポートを行っている立場から、体づくりに役立つ栄養素や食材の選び方を解説。農業生産者にも役立つ特集である

『もうひとつの東京五輪』を語る

23 木造・木質化が東京五輪のレガシーになる

小島 孝文

情報戦略レポート

15 農業景況DI 2015年は大幅改善 調査開始以来最高値

—2015年下半年 農業景況調査—

経営紹介

経営紹介

25 有限会社モリシゲ物産／埼玉県 矢島 繁

エゴマがブームだ。需要の裾野が広がったことを歓迎しながらも、ブームに左右されることがない。ぶれない経営を息長く続けることが恩返しと語る

変革は人にあり

27 有限会社椎名洋ラン園／千葉県 椎名 正剛

日本に胡蝶蘭を飾り楽しむ文化を定着させたいと開発したミディー胡蝶蘭は、国内での人気以外にも、国際園芸博での評価をきっかけに世界的認知度を上げる



撮影:北條 純之

長野県松本市
2002年6月撮影

タマネギの収穫

■鉛筆の太さほどの小さな苗で信州の厳しい冬を越し、収穫の時期を迎えたタマネギ。初夏の日差しの中、力強く成長した姿を見せた■

シリーズ・その他

観天望気

隄より始めよ 坂根 正弘 2

農と食の邂逅

株式会社トマトの村／高知県

野村 妙子

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

出会いに感謝! 前田 亜季 22

耳よりな話 171

常識破った養液栽培技術 吉岡 宏 30

まちづくりむらづくり

年貢を納めて村民になろうとの掛け声

人口減少集落にどんと移住者が現れた

シェアビレッジプロジェクト 株式会社kedama／秋田県

武田 昌大 31

書 評

河合 浩樹 著『虫たちと作った世界に一つだけのレモン』

村田 泰夫 34

インフォメーション

新規就農者を対象とした研修会を開催 鳥取支店 35

長崎県公庫水産友の会を開催 長崎支店 35

HACCP支援法に基づく指定認定機関勉強会を開催

融資企画部 35

若手農業者育成セミナーを開催 青森支店 35

スーパーL資金の実質無利子化のための

金利負担軽減措置、実質無担保・無保証人貸付措置 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第11回アグリフードEXPO東京2016 38

観天 望気

隗より始めよ

私は、会社の経営でも、行政でも、また農業でも、課題の「見える化」が改革の出発点だと考えています。私どもの会社は、農業ビジネスに直接携わってはいませんが、地域貢献のために石川県でヒト・モノ・カネを出すことで農業・林業の技術支援をしています。そして「見える化」の過程で気付かされるのは、民間が知恵を出したらやれることはたくさんある、ということです。

代表的な例はコメの乾田直播です。均一な品質のコメができなという農家の悩みを突き詰めると、田植え作業で耕地が凸凹になるからだと分かりました。そこでコマツのICT施工技術を活用してブルドーザーで耕地を平らにしたらと種を直接まき、その後で水を張ればよいということになりました。この方法で作ったコメが去年収穫され、極めて高い生産性で、かつ味の出来栄も良かったと聞いています。

林業にも成果が出ており、地元のJ Aと森林組合が「このような取り組みなら私たちでもできそうです。人手と費用は工面しますので、この先も知恵を貸してください」と言ってくれました。ICTによる作業の効率化はもちろんですが、この意識の変化が一番大きな成果だと思います。日本の一次産業はまだ十分に伸びる余地があります。

日本を取り巻く環境も、そして国内事情も変化しており、深刻な少子高齢化が進む中で現状維持に汲々としていても、先細りするだけです。少なくとも、努力した人がその分だけ報われる仕組みにならないと、若い人がその産業に魅力を感じられず、新たに始めようとする人はなかなか増えないでしょう。

私が民間メンバーとなっている国家戦略特別区域諮問会議では、深刻な人口減少に悩む兵庫県養父市の農地流動化、六次産業化推進など、農業を切り口に外部から人を呼び込んだの町おこしを支援しており、私もできる限りの応援をしています。改革は一朝一夕には成らず、できない理由ばかりを探しても何も変わりません。「隗より始めよ」の精神で、できることから着手していくことが日本の一次産業が変わる第一歩であると考えています。



株式会社小松製作所 相談役

坂根 正弘

さかね まさひろ

1941年生まれ。島根県出身。63年大阪市立大学工学部卒業。同年株式会社小松製作所入社。89年取締役、90年小松ドレッサーカンパニー（現コマツアメリカ株式会社）社長、99年株式会社小松製作所代表取締役副社長、2001年社長、07年会長などを経て、13年より現職。14年より国家戦略特別区域諮問会議議員などを歴任。

トマトをたっぷり活かした
パイとタルトの専門店
「野菜がタルト」をオープン
かぶりつきたくなるほど
トマトは私の宝物です

農と食
の邂逅

野村 妙子 さん

高知県高知市春野町
株式会社トマトの村 代表取締役

国内有数のトマト産地で、ロックウール養液栽培に挑戦。室戸海洋深層水のにがりを使用し、糖度と酸味のバランス良い味を特長に、トマトレシピの提案などトマトの用途を拡げる。六次産業化で母娘が農業の夢を追う。





P19: 高知県初の野菜を使ったパイとタルトの専門店を出した野村妙子さんと娘のひかるさん。タルトは収穫したてのトマトを使っている P20: 主役のトマトの品種は桃太郎ピース。1日に2〜3トン収穫する(右上) 出荷・販売の責任者の小松寛幸常務(右下右) 店を切り盛りするひかるさんもトマトが大好き(右下左)。集荷施設がある拠点となるハウスにて(左)

県民性を先取りしたお店

高知駅から車を三〇分ほど走らせると、ビニールハウスがいくつも連なる春野町の風景が広がる。温暖な気候を活かした施設栽培が盛んな地域だ。ここに高知県初の野菜を使ったパイとタルトの専門店「野菜がタルト」がオープンしたのは今年の三月一八日。野村妙子さん(五〇歳)が代表を務める株式会社トマトの村が開いた。

木材を基調としたかわいらしい店にはパイとタルトが並ぶカウンター、そしてイートインコーナーがある。妙子さんの長女のひかるさん(三歳)やスタッフがパイ生地を一から作る場所から始める。自慢のトマトをはじめ、春野町産の野菜がふんだんに使われる。地元メディアの紹介もあって、初日から「びっくりするほど」(妙子さん)お客さんが駆けつけた。休日にはパイとタルトを合わせて一日三〇〇個近く売れるという。

この建物では以前からトマトを直売する「良心市」を定期的に開いてきたが、市場の規格から外れたトマトを活かしたいとかねてから思っていた。とはいえ、洋菓子の中でも高度な技術が求められるパイになぜ着目したのか。

「トマトはサラダで食べるイメージが強いでしょ。それを変えたかった」と妙子さんは店を開いた動機を語る。そして「野菜たっぷりで食事として食べるタルト専門店がニューヨークで人気ですよ」。妙子さん

が経営の助言を仰ぐコンサルタントを紹介して知り合ったフードコーディネーターの一言もヒントになった。ヒントを得たひかるさんから若いスタッフが東京に向き、パイの専門店があることを知り、パイとタルトを看板商品に据えることを決めた。朝から深夜までかけて技術を身に付け、開店にこぎつけた。

パイは一つ三五〇円、タルトは二八〇(三〇〇円(いずれも税別))。農村地域としては決して安い価格ではないが、お客さんが絶えないのは「高知の人たちは新しいものに飛びつく」と妙子さん。一〇〇%手作りなので大量生産はできない。売り切れてしまう商品もあり、「なかなか買えない」「売り切れだったので、今度こそ買えますように」とネットで評判になっているという。

「新しい物好きな県民性だけに、パイやタルトに飽きられんようにしないと」。お客さんの反応を見ながら、新メニューを充実しようと計画中だ。「店ができたことでもっとチャレンジしたいという気持ち湧いてくるんです」。妙子さんは満面の笑みで話す。

背中を押してくれたスタッフ

夫の巧さん(享年四五歳)の急逝後、妙子さんがトマトの村を引っ張っていくようになったのは二〇一一年から。二二歳で結婚し「夢は専業主婦だったのですが」と言う妙子さん。だが、巧さんを支えながら積極的にイベントに出掛けては試食販売をしたりレシピを紹介したりと、トマトをおいしく食べてもらう

ための提案に力を入れてきた。

トマトの栽培面積は三・四畓と県内トップの規模だった。これだけの大規模経営を引き継ぐには大きな決心が必要だったに違いない。背中を押してくれたのはトマトの村のスタッフたちだった。「みんな残ると言ってくれました。私も頑張るしかないと思いました」



「単なるパイとタルトの店ではなく、農家がやっている店であることをもっとPRしたい」と妙子さん。直売する野菜の品ぞろえも増やす予定だ

中でも生産、販売の各責任者である野村貴隆さん(四六歳)と小松寛幸さん(四〇歳)の存在は妙子さんにとって非常に大きい。もともとメロン農家だった野村さんは巧さんにはれられて、二年越しでスカウトされて従業員になった。小松さんは農業をしたいと脱サラした矢先、巧さんと出会い、自ら志願して

仲間に加わった。

高知県のトマトといえば、糖度の高いフルーッとマトが知られている。一方、妙さんたちのトマトは水分をたっぷり含んだ、糖度と酸味のバランスがとれた大玉トマトだ。

これらはロックウール栽培※で作られる。体積の大きい土を使う方法と異なり、水と養分を集中的にロックウールの培地を介してトマトの樹に送り込むことができる。その分、成長のスピードも速く、収量も増やしやすい。しかし野村さんは「収量だけを追うつもりはない」と量と味のバランスを重視したトマト作りを追求している。室戸海洋深層水の「にがり」も使い、ミネラルを豊富に含む点も特徴だ。出荷と販売を担う小松さんは「これからの農業はいかにお客さんが求める商品を安定して届けられるかに尽きると思います」と話す。二人の応援を背に受けて妙さんは経営全般に目を配りつつ、営業やPRに引き続き精を出す。「トマトのためならどこへでも行きます」。この積極性が功を奏したのだろう。「お宅のトマトが欲しい」というスーパーやレストランが少しずつ増えてきた。なんと素晴らしいスクラムだろう。三人が同じ方向を見つめ、各自の役割を果たしている。

二つの夢を実現

「私にとってトマトは宝。うちのトマトの味が大好き。毎日食べても飽きないし、かぶりつきたくなる。このおいしさのファンを増やしたい」と妙さんは目を輝かせる。高知

城の近くで毎週日曜日に開催される日曜市でも販売され、「懐かしい味がする」と根強いリピーターがいるそう。なるほど納得である。いただいたトマトは実にみずみずしく、思わず顔がほころんでしまった。

スーパーでのイベントでは必ず簡単にできる料理のレシピを渡す。フライパン一つでできるトマトリゾットやトマトソテー。焼きや鍋物などに入れてもおいしいのだそう。イベントでは、トマトをかたどった帽子をかぶり、トマトの絵柄のエプロンを身にまとう。トマトについて熱く語る様子を見ていたら、愛らしいお顔がトマトに見えてきた。楽天的で周囲を明るくする雰囲気にし、周りの人もそんな妙さんに支援の手を差し伸べる。そんなやりとりが日々行われているのだろう。

二〇一五年一月、念願の法人化を果たした。「個人経営のままだと仮に私が辞めてしまっても何も残らないけれど、会社という器があれば継続していける。従業員が共通の目標に向かってトマトを作り続けてくれればうれしい」。法人化もトマトを活かしたお店も、巧さんと話し合ってきた夢だ。『野菜がタルト』のオープンをすごく喜んでくれていると思う。店内に飾ってあるひげ面の巧さんのイラストを見上げながら妙さんが言った。 **F**

(青山 浩子／文 河野 千年／撮影)

※ロックウールという岩石から作られ、繊維で固めたものを通じて養液を流し、作物を栽培する方法

自動車の運転も苦手、免許はもちろんオートマ限定。そんな私が、昨年、北海道を舞台にした農業女子のドラマ撮影でトラクターの運転にチャレンジしました。「トラクターばん馬レース」に出場するという場面だったのですが、実際のトラクターは想像以上の大きさで、目まいがしそうでした。ただただ無心で必死にクラッチやハンドルをさばきました。農作業も、ドラマのモデルとなった農業女子はらべ娘の皆さんから教わりました。とうきびの種をまいたり、トマトやピーマンの収穫・仕分けなど色んなことをさせてもらいました。アスパラ収穫では、教えてもらった太さのアスパラを鎌で刈っても、太すぎたり細すぎたり！その感覚的な差が理解できない私は、作業前に「これ、OKですか？」と確認。そして「なぜ？どうして？」と質問攻めにしては笑われていました。

他にも撮影の空き時間など、収穫したてのメロンやトマトを食べながら、同世代の農業女子の皆さんといろんなお話をしました。天気で左右されるなど難しいこともあるけど野菜の成長を見るのがうれしい、新しい野菜を生産するのが楽しいと皆さん前向きでチャレンジ精神にあふれています。でも一方、女子ならではの悩みも抱えていて。他者から経営者として見られず「お手伝いでしょ？」と言われてしまう事もあるとか。彼女たちが「婚活もとても重要なんです」と言うのには最初はなんだろうって思いました。でも、出会う場所がなかなかないこと、婿に入ってくれるなど協力してくれる人ではないと難しい、など理由を教えてくれて納得しました。そして、私が「大変なこと多い中で、どうして農業をやっているの？」と聞くと「好きだから」「やりたいことだから」「楽しいから」ときらきらした笑顔で即答！そんな生き生きと輝いている農業女子の皆さんをずっと応援したいなと思っています。

東京に戻ってから、私は以前より食に向かい合うようになりました。スーパーで野菜を手にとると、ここまで大きく育ててくれた生産者や、規格外としてはじかれてしまったものはどのくらいだろうとか想像してしまふ。そして、愛情持って大切に育てている農業女子を思い出している、「大事に食べよう、決して無駄にしない」と思うんです。この変化は、農業女子の皆さんに出会ったから。出会いに感謝です。



女優
前田 亜季

まえだ あき
1985年7月11日生まれ。東京都出身。1992年にデビュー。2001年、映画「バトル・ロワイヤル」で第24回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞。近年の出演作に「ごちそうさん」「サイレント・プア」「花咲舞が黙ってない」「ラストホープ」「OUR HOUSE」などがある。舞台やCM、ドキュメンタリーのナレーションなど幅広く活躍している。

出会いに感謝！

常識破った養液栽培技術

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

吉岡 宏

野

菜などの養液栽培では化学肥料が用いられます。植物はアミノ酸などの有機物を直接吸収することが実験室レベルで確認されていますが、養液の中に有機物が大量に存在すると腐敗が起こり、根に大きなダメージを与えます。このため、養液栽培に有機物を肥料として用いることは困難であり、用いる試みをしていても添加量はごくわずかなものでした。

二〇〇六年、野菜茶業研究所の篠原信さんは、養液栽培で有機物を直接肥料として用いる技術を世界に先駆けて開発し、発表しました。これまでの常識を打ち破ったこの技術は、微生物の働きを利用する日本酒の醸造技術にヒントを得て開発されたものです。

日本酒は麹菌によって、でんぷんがブドウ糖に変化する糖化と、酵母菌によってブドウ糖がアルコールに変化する二段階の発酵が、一つの容器の中で同時に進む「複式並行発酵法」によって造られます。

篠原さんが開発した技術では、養液の中に微生物を生息させ、有機物の分解に関わる微生物生態系をつくり上げること、添加された有機物が有機態窒素からアンモニアへ、さらに硝酸に分解（無機化）が進み、生成された硝酸が作物に吸収されます。

このように酒造りと同様に一つの容器内で



トマトの有機質肥料活用型養液栽培 (写真提供：篠原信氏)

アンモニア化と硝酸化の二つが同時に進行することから、篠原さんはこの過程を「複式並行無機化法」と呼んでいます。

なお、篠原さんは大学では醸造学を専攻し、そこで教わった知識が開発の動機になったとのことでした。

有

機質肥料として、カツオの煮汁やコーンステイプリーカー（トウモロコシからで

る副産物）を肥料に用いたトマトやサラダ菜の養液栽培試験では、化学肥料と同等の生育が得られています。

また、おから、菜種油カス、魚粉なども利用できます。さらに、この養液栽培法のもう一つの優れた点は、青枯病を引き起こす青枯病菌や多くの土壌伝染性病害を引き起こす病原性フザリウム菌の増殖を抑えることで、これらの病原菌が混入して

も発病しません。

現在は、カツオの煮汁などを肥料として用いられますが、技術開発がさらに進めば、トマトなどの果菜類の葉や茎などを肥料として直接利用することも可能です。究極のリサイクル農業への発展も夢物語ではないように思われます。

日本の伝統技術である醸造を農業生産に活用した篠原さんの発想に敬意を表します。

F



Profile

よしおか ひろし

1948年京都府生まれ。弘前大学大学院農学研究科（修士課程）修了後、農林省野菜試験場入省。農林水産技術会議事務局研究調査官、（独）農研機構野菜茶業研究所長、（社）日本施設園芸協会常務理事などを経て、2012年10月から現職。専門は野菜の栽培生理。農学博士、技術士（農業部門）。



年貢を納めて村民になろうとの掛け声 人口減少集落にどんと移住者が現れた

秋田県北秋田市

シェアビレッジプロジェクト
株式会社 kedama 代表取締役

武田 昌大



日本の原風景を残したい

秋田県は少子高齢化率日本ワースト一位、人口減少率日本ワースト一位とされ、あと一〇〇年以内で人口がゼロになるかもしれないと言われている。その現状は町を訪れてみるとすぐ分かる。立ち並ぶ商店はシャッターを下ろし、町を行き交う人の姿は数えるほどだ。そんな秋田県に今、人口が増え続けている一つの村がある。

それが「SHARE VILLAGE(シェアビレッジ)」である。聞き慣れない横文字で、村と呼んでいるにもかかわらず、そこにはたった一軒の古民家があるのみ。キャッチコピーは「年貢を納めて村民になろう」。その言葉に共感し、引きつけられたのか、村民は現在一二〇〇人を超えている。村は村民でにぎわい、人口減少が著しい集落に移住者もどんどん現れ始めている。これは日本の辺境の地、秋田から始まる「村」の概念を覆す新しい村づくりのプロジェクトである。

記念すべき第一番目の村「シェアビレッジ町村」の舞台となるのは、秋田県の中心である秋田市から車で四〇分ほど走ったところにある五城目町ごじょうめまちという日本の原風景が残る田舎町である。人口は約一万人、五二〇年の歴史を誇る朝市を中心に、木工芸や陶芸の職人や造り酒屋が集まり、農林業をベースとした暮らしが営まれている。そんな歴史ある町も高齢化率は四〇%を超え、集落や風景の消滅も大きな課題となっていた。

五城目町をさらに山に向かって進んでいくと、町に村と書いて「まちむら」という小さな集落があり、その集落の中心にひととき目立つ大きなかやぶき屋根の古民家がある。敷地面積九八二平方メートルの広い土地に立つこの家は、築一三三年の歴史があり、この集落のシンボルとなっている。

二〇一四年の春、私は知り合いを通してこの家の話を聞き、初めてこの集落を訪れた。かやぶきの古民家を外から見たことはあったが、中に入った経験がなかった私はその造りに圧倒された。

想像以上に広々とした土間で、その隅にはかまどが二口あり、見上げると二〇〇年以上前の太い梁が渡され、さらに傷んだかやぶき屋根の天井の隙間からすかに太陽の光が見える。畳敷きの茶の間には小さいながらもいろりがあり、広い玄関からは庭の植栽を眺めることができる。私は古き良き日本の原風景をそこに垣間見た。

衝撃を受けた古民家の解体話

ひとしきり感動している私にオーナーが衝撃の一言を口にした。「この古民家を夏には解体しようと思う」と言うのだ。全ての始まりはこの言葉がきっかけである。障子が破れ、床板は抜け、屋根も朽ち果てているというのなら分かるが、今すぐにも人が住めそうなくらいきれいな家を、なぜ壊そうというのか理解できなかった。理由は維持費の問題だった。かやぶき屋根はトタン屋根と違い、古くなったり傷んだりした箇所は、その都度ふき替えて維持していく費用が非常に高く、所

profile

武田 昌大 たけだ まさひろ

1985年秋田県北秋田市生まれ。2008年立命館大学情報理工学部卒業後、東京のデジタルコンテンツ業界に従事。11年8月株式会社kedama設立。ふるさとである秋田県の農業の未来に危機感を持ち、若手米農家集団トラ男を結成。お米の通販サイト「torao.jp」を運営。15年より古民家を活用した村づくり「SHARE VILLAGE」を始動。グッドデザイン2015地域づくりデザイン賞受賞。

「SHARE VILLAGE」

日本の辺境から始まる村の概念を覆すプロジェクト。2015年秋田県五城目町に第一の村を開村。「年貢を納めて村民になろう」をキャッチコピーに、年貢を納めると誰でも村民になれる。村民だけが集まる定期開催の飲み会「寄合」や、村民同士で村を訪れる「里帰」、年に一度の夏祭り「一揆」など村を楽しむ要素がたくさんある。全国に広げるため、第二、第三の村を開墾中。



上：2015年5月2日に開催されたシェアビレッジ町村の開村祭の様子
下：開村祭のために県内外から約100人の村民が古民家を訪れた

有し続けるには大きな負担になるという。

私はその話を聞いた時に、非常に悔しい思いをしたのと同時に、もしかしたらこの家だけではなくて日本全国にある古民家が同じ理由で壊されていってしまうかもしれないと危惧した。そこで次の一〇〇年にも、この日本の原風景を残すための仕組みを考えようと決意した。

私は古民家鑑定士でも、建築家でもない。もとは五城目町の近隣の北秋田市で生まれ育ち、二〇一〇年までは東京のゲーム会社で働いていた普通の若者である。当時二五歳だった私はふるさとである秋田県の衰退を目の当たりにして、そんな秋田を元気にしたいと一念発起し、小さな会社を立ち上げた。「高齢化の進む秋田の農業を若手の力で盛り上げたい」「今のままの農産物流通で

は農業の未来はない」と言い続けた。

その想いに共感してくれた専業農家の三代目の三人が集まり、トラクターに乗る男前集団「トラ男」を結成し、お米のブランディングと自社サイト「torao.jp」での直販や都市への販路拡大に取り組んだ。私は秋田を知ってもらい、好きになってもらうために「お米」を軸に発信し続けた。その結果、農業体験などのイベントを通して徐々にお客さんが秋田に足を運んでくれるようになった。そんな変化にやりがいを感じる毎日だったが、三年が過ぎた頃、あることに気が付いた。「知ってもらったり来てももらったりすることはできたが、人口減の秋田に人に住んでもらうにはどうしたらよいのだろうか?」と。その時から「人々が集える拠点を作りたい」と思い始めるようになった。

古民家を村に、集う人は村民

一四年の古民家解体の話に戻る。日本の原風景であるこの古民家を残し、かつ人々が集える拠点にすることはできないかと頭をひねった。古民家保全の多くは、補助金を使った維持やりノベーションをして宿や飲食店へ変える方法が主流だが、私はこの古民家に人が集う風景を想像した。

地元のおじいちゃん、おばあちゃんもいれば、都会の若者もいる。一緒に食事をしたり、たまには音楽ライブが開かれたり、単なる宿泊施設やカフェスペースとしての利用ではなく、そこに集う人たちに自由に使ってもらいたいと思った時に「村」というコンセプトが生まれた。古民家を村と見立て、そこに集う人々を村民と呼ぶ。村民は村

を維持するために必要なお金をシェアして、年に一度村に納める。そんな日本の原風景を守るためのシェアリングシステムがシェアビレッジである。

年会費を払って会員になるのではなく、「年貢を納めて村民になる」というのがシェアビレッジの面白さの狙いである。村民になると自分の好きな時に自分の村へ行け、田舎体験をしたり、宿泊したり、のどかな環境で仕事をしたりと、まさに自分の村、第二のふるさとを持つことができるのである。

「せっかく村民になっても年に何回も田舎に行けないよ」という人のためにも村民だけが集まる飲み会「寄合(YORIIAI)」を都会でも定期的開催し、会社でもなく、同級生でもなく、出身地も関係のない村民同士が気軽に仲良くなれ、村民のコミュニティを醸成する。そうやって村民同士が仲良くなることで生まれるのが、「里帰(SA TOGAEER)」というツアーである。

仲良くなった村民同士で実際に自分たちの村に遊びに行き、季節ごとのイベントに参加する。春にはお花見、夏には蛍観賞、秋には紅葉狩り、冬にはいろいろで鍋を囲む。かやをふき替えたり、敷地内の畑を「開墾(KAIKON)」する。年に一度のお祭り「一揆(IKKI)」という名のフェスでは、村民みんなで「村歌(SONG)」を歌うなど村の生活の楽しみ方は無限大である。

克服する課題は法律と資金

私は古民家を守るためにシェアビレッジを企画したが、これを実行するにはたくさんの仲間が必要だった。そこで地元にいる若手のベンチャー企業の社長や地域おこし協力隊のメンバーに会

い、シェアビレッジの仕組みや、古民家を守って人々が集う場に変えていきたいことを伝えた。この想いに共感してくれた仲間が次第に集まり、プロジェクトとして動き始めた。

大きな課題は二つ。一つ目は法律である。築二三年の古民家に人が泊まれるようにするには旅館業法などの宿泊に関する法律をクリアしなければならぬ。さまざまな事例を調査し、県や保健所などの専門家と議論を重ねた結果、半年を経て「農家民宿」として認可を取ることができた。

二つ目は資金である。農家民宿として開業する条件に水回りの改修があり、その見積もり額は約四〇〇万円。資金調達の方法として私たちが選んだのはクラウドファンディングという手法だった。インターネット上で資金を集めるこの手法は単に資金を集めるだけではなく、世の中の人に認知してもらったためのPRツールとしても優れているし、何より開業前に多くのファンを作ることができるのが魅力だった。目標金額を一〇〇万円に設定し、四五日間募集を行ったところ、全国八六二人から約六〇〇万円を集めることに成功した。特に、都市出身で田舎を持たない人々から「ふるさとを持つことができてうれしい！」といった反響をたくさんいただくことができた。

集めた資金で古民家を改修し、二〇一五年五月シェアビレッジ町村を開村することとなった。その八月に開催した、年に一度の夏祭り「一揆」には三〇〇人を超える大勢の人が集まり、集落のお年寄りも驚きの様子だったが、これによって、お年寄りの方々にも面白い変化が生まれ始めている。「年貢」と書かれた茶封筒を握り締め、シェアビ

レッジにやってくるようになったのだ。

ネットワーク型の村づくり

シェアビレッジができたことで県内外から多くの人々が集落を訪れるようになり、交流の場となった。今まで若い人と話す機会がほとんどなく、寂しい思いをしていたお年寄りたちが、若者ともっと交流したいと、自らやって来てくれるのはうれしいことである。

シェアビレッジは村の概念を覆すプロジェクトである。村があるから村民がいるのではなく、村民がいれば村ができていくというものだ。つまり、年貢を納める村民が増えれば増えるほど、日本全国に散らばる古民家や原風景をシェアビレッジに変えていくことができる。日本全体を大きな村として、そこに点在する古民家をつなぐ、ネットワーク型の村づくりである。村民になると全ての村を利用することができ、たくさんのおふるさとを持つところが最大の魅力である。今年は第二の村を四国で、第三の村を近畿で立ち上げる予定で、村民をホームページ上で随時募集している。

全国に広がることで世界から日本へ、都市から田舎へ、田舎から田舎へ、人の動きを作りたいと考えている。日本の原風景が「村」となり、都市の人々が「村民」になることで生まれる新しいコミュニティ、新しい関係が今後の人口減少が進む地方を明るくする一つの方法だと思っている。ともすれば地方というと暗い話題が多い昨今、ワクワクする仕組みで都市や若者を巻き込むことで、きつと未来は明るくなるのではないだろうか。

さあ、あなたも年貢を納めて村民になろう。



『虫たちと作った 世界に一つだけのレモン』

河合 浩樹 著



(朝日新聞出版・1500円 税別)

自然との共生で恵みがいっぱい

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

完全無農薬でレモンを栽培している愛知県豊橋市の果樹農家、河合浩樹さんの奮闘記である。私たちが目にするレモンは、かつて輸入物だったが、今では国産も一割程度のシェアを持っている。果樹全般に言えることだが、完全無農薬での栽培は極めて難しい。

ミカン農家の五代目である河合さんは、天候に左右されないハウス栽培で経営規模を大きくしてきた。レモンの栽培を始めた理由は、収穫期間が半年と長いので経営をより安定させられると思ったからだと言う。

レモンは果汁を絞ったり、輪切りにして皮ごと紅茶に浮かべて使われる。輸入レモンに含有されるポストハーベストによる、健康への影響を懸念する声もある。ミカンでは少ないながらも農薬を使用している河合さんだが、レモン栽培

培では完全無農薬栽培に挑戦しようと決心した。一九九三年、レモンの苗木一〇〇本を植えることから始めた。案の定、虫が大量に発生したが、天敵の虫を探して導入すれば対応できると思っていた。だが、そんなに甘くはなかった。虫やカビにやられた年もあり、どこにどんな虫とその天敵がいるのか、手探りで学ぶしかなかった。

ハウス内で観察したり図鑑で調べたりして、約三〇種類の虫たちの生態が分かるようになった。アブラムシを食べてくれるテントウムシや、チョウの幼虫などいろいろな虫を食べてくれるカマキリのことを、今では「従業員」と河合さんは呼んでいる。

さらに興味深いのは、完全無農薬のレモン販売先の開拓である。当初、農協を通じて販売していたが、完全無農薬レモンの価値が仕入れ担当者に理解してもらえず、期待する値段で売れなかった。

そこで、消費者に直接、完全無農薬のレモンの良さを分かってもらおうと考えた河合さんは、二〇〇一年にインターネットを活用した直接販売に乗り出した。一般の消費者だけでなくレストランのシェフや菓子職人さんたちと直接交渉してくる中で、新しい情報が向こうから飛び込んでくるメリットも知った。

この本には、レモンの実を守る果樹園の虫図鑑、レモンを使った料理のレシピ、レモンの木の育て方も載っており、興味が尽きない。



読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2016年4月1日～4月30日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 日経ビジネス 2016年3月28日号 発表! TPP時代に勝てる 農産物ジャパン		日経BP社	639円
2 バターが買えない不都合な真実	山下 一仁/著	幻冬舎	820円
3 小さい農業で稼ぐコツ	西田 栄喜/著	農山漁村文化協会	1,700円
4 「結農」論	木内 博一/著	亜紀書房	1,600円
5 週刊ダイヤモンド 2016年2月6日号 攻めに転じる大チャンス 儲かる農業		ダイヤモンド社	657円
6 GDP4%の日本農業は自動車産業を超える	窪田 新之助/著	講談社	890円
7 林業イノベーションー林業と社会の豊かな関係を目指して	長谷川 尚史/著	全国林業改良普及協会	1,100円
8 森と山と川でたどるドイツ史	池上 俊一/著	岩波書店	880円
9 農林水産六法 平成28年版	農林水産法令研究会/編	学陽書房	13,000円
10 農業ビジネスマガジン 2016 WINTER Vol.12 農業の「困った」に応える最新テクノロジー		イカロス出版	1,500円

新規就農者を対象とした 研修会を開催

二月四日、鳥取県湯梨浜町で「新規就農者研修会」を開催し、青年等就農資金をご利用いただいたお客さま一九人と、J Aグループ鳥取の職員にご参加いただきました。

農業経営上級アドバイザーの井崎敏彦氏を講師にお招きし、経営者としての心構えや税金対応、経営計画の必要性など、もうかる農業経営に必要なポイントについてご説明いただきました。

参加者からは「税金などあまり関心のなかったことに目を向けられ、大変有意義でした」「次回もぜひ参加を希望します」などの感想が寄せられました。

(鳥取支店)



参加者は興味深い講義に聞き入りました

長崎県公庫水産友の会を 開催

二月四日、長崎市にて「長崎県公庫水産友の会」を開催し、県内の漁業経営者や造船所など漁業関連企業、行政、金融機関など総勢一〇〇人にご参加いただきました。

講演会では、福島県漁連会長で株式会社酢屋商店代表取締役社長の野崎哲氏に「東日本大震災と福島県の漁業復興に向けての取組み」と題してご講演いただきました。

参加者は東日本大震災や原発事故での福島県の漁業者の方々の災害対応や、復興への道のりの遠さについて思いを馳せていました。続く懇親会では、野崎氏も交えた情報交換の場となりました。

(長崎支店)



福島復興を力強く語る野崎氏

HACCP支援法に基づく 指定認定機関勉強会を開催

二月一日、日本公庫本店にて農林水産省との共催で、HACCP支援法に基づく計画認定業務勉強会を開催。食品関係業界団体など指定認定機関一七機関二四人のほか、農林水産省、厚生労働省の担当者にもご参加いただきました。

取引先から衛生管理の向上を要請されたのを機に本制度利用を知ったなど三機関から計画認定事例をご紹介いただいた後、制度活用促進や円滑に認定を行うための方策について討議しました。参加者からは「他機関の取り組みが分かり参考になりました」との感想をいただきました。

(融資企画部)



厚生労働省などから情報提供が行われました

若手農業者育成セミナーを 開催

三月一日、支店にて日本農業法人協会主催のセミナーを開催し、県内の若手農業者を中心に一人一人にご参加いただきました。

農林水産事業本部農業経営上級アドバイザーの上原学が経営指針書策定の「導入編」として、プレゼンテーションの基礎や農業をめぐる外部環境について講義を行いました。グループ討議では参加者自身の農業経営の現状や課題などについて議論が交わされました。

本セミナーは参加者に経営指針書を策定・発表してもらうことを最終目標としており、全三回開催する予定です。

(青森支店)



講師の話に熱心に聞き入る参加者

スーパーL資金の実質無利子化のための 金利負担軽減措置、実質無担保・無保証人貸付措置

— 2015年度補正予算成立に伴う制度改正 —

環太平洋パートナーシップ(TPP)協定による新たな国際環境の下で、新たに規模拡大、農産物輸出などの攻めの経営展開に取り組む農業者を支援するため、スーパーL資金に措置された実質無利子^(※1)となる金利負担軽減措置および実質無担保・無保証人貸付措置の取り扱いを開始しました。

※1 利子助成の上限は2%です。このため、日本公庫の貸付金利が2%を超える場合は、2%を超えた部分は借入者の負担となります。

■ 制度の概要

(1) 金利負担軽減措置 (TPP対策特別枠)

対象者	「人・農地プラン(地域農業マスタープラン)」 ^(※2) の中心経営体として位置付けられた認定農業者等であって、新たに攻めの経営展開を行う計画(経営展開計画)を策定した方
対象事業	農地等の取得・造成、施設・機械の取得、改良・造成等、長期運転資金 ^(※3)
期 間	貸付当初5年間 6年目以降は、通常の利息を支払う
対象限度額	【個人】3億円(特認6億円) 【法人】10億円(特認20億円) 融資限度額と同額
事業実施期間	2016年2月1日以降に日本公庫が融資決定した案件(ただし、取扱枠に達するまで)

※2 東日本大震災で津波被害のあった6県50市町村においては「経営再開マスタープラン」となります。

※3 国庫補助事業の補助残部分をご融資する場合も対象となります。経営の安定化(負債整理など)のために資金をご利用いただく場合は、実質無利子化の対象となりません。

(2) 実質無担保・無保証人貸付措置

対象者	次の全ての要件を満たす方 1 上記の金利負担軽減措置を受ける方のうち、次のいずれかに該当する方 ① 農地中間管理機構から農地を借り入れて事業を実施している方 ② 事業用資産のおおむね2分の1以上を借り入れて事業を実施している方 ③ 融資対象物件を担保に提供することができない事業を行う方 2 担保に提供できる事業用資産がない、または保有する事業用資産の評価が著しく低い方 3 融資審査により、事業を遂行できる経営能力があること、および投資する事業に十分に事業性があることが確認された方
担 保	原則として、融資対象物件に限る
保証人	原則として、個人の場合は不要、法人で必要な場合は代表者のみ

ご留意いただきたい事項

■実質無利子化のための金利負担軽減措置および実質無担保・無保証人貸付措置は取扱額に限りがあり、資金の使いみちやご融資の実行の時期によっては、ご希望に沿えない場合があります。

■上記以外にも資金をご利用いただくための要件などがあります。詳しくは、最寄りの日本公庫支店農林水産事業までお問い合わせください。

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査（農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など）結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(https://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。
(情報企画部)

国は二〇二〇年までに農林水産物・食品の輸出額一兆円を目指しています。そのためには輸出先の食習慣や嗜好などの市場性とその国特有の法規制を徹底調査して、積極的に打って出るチャンスと捉えるべきです。訪日外国人観光客が二〇

四月号「特集 農水産物輸出成功の視線」を読みました。今まで食材の多くを輸入に依存していた日本は、輸出分野には極めて消極的であったと私は思います。しかし、世界がグローバル化し、海外での日本食や食文化も徐々に浸透してきました。日本の農林水産物や加工食品の安全で品質の良さをアピールすれば、海外での受け入れの可能性はますます高まるでしょう。

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきますことがあります。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒〇〇〇〇〇〇四

東京都千代田区大手町一四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三・三七〇一・三五〇

〇〇万人目の今、官民一体となつて開拓すれば必ず成功すると確信しています。
(広島市 巨幸男)

AFCフォーラム

編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
飯田 晋平 小形 正枝 城間 綾子
亀上 早織

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <https://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル
Tel. 03(3432)2927
Fax. 03(3578)9432
ホームページ
<http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/>
お問い合わせフォーム
<http://info.nissyoku.co.jp/toiawase/>

定価 514円(税込)

●ご意見、ご提案をお待ちしております。

●巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとと田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

編集後記

④エンブレムも決まり、東京オリンピック・パラリンピックへ胸が高鳴ります。まず選手の活躍が注目されますが、おいしく安全で環境や人権に配慮された食材や、呼吸すれば感じる木の文化など、業界が貢献できることも多そうです。私自身もおもてなしの心で参加したいです。何十年後もああ良かったなあ、と思えるように。
(嶋貫)

④料理をシェアするとかシェアハウスなど、皆で分け合って楽しむ「シェア」という言葉をよく耳にします。「まちづくりむらづくり」は秋田で村をシェアしたお話で、日本の原風景である古民家を残したいという深い想いからスタートしたもの。「年貢を納める」という昔の言葉からは想像できない楽しい村で、私も寄合に参加してみたいです。(小形)

④椎名さんの胡蝶蘭開発を続ける想いを知り、感銘を受けました。習い事の先生宅には冬になると胡蝶蘭が飾られます。とてもすてきなと憧れていましたが、自身のために胡蝶蘭を購入することは考えてもいませんでした。でも、今冬はミディー胡蝶蘭を窓辺に飾ってみよう。気が早いですが、考えるだけでワクワクします。
(城間)

④今月の書評で紹介した国産の完全無農薬レモン。安心して皮ごと食べられるレモンを作るのは大変なご苦労があると知りました。さて、先日ラーメン店に「自家製レモン酢」がありました。四等分された皮つきレモンが酢に漬かっており、レモンの香りと酸味でこってりラーメンもさっぱり味となります。夏が似合う調味料です。
(亀上)

国産にこだわり
農と食をつなぎます。

第11回 アグリフードEXPO 東京 2016

—— プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会 ——

日時

8月18^木日/19^金日
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

東京ビッグサイト 東4ホール



農業の発進！東京五輪へ

■AFCフォーラム 平成28年6月1日発行(毎月1回1日発行)第64巻3号(790号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/株式会社日本経済新聞社 〒105-0003 東京都港区西新橋2-1-2 第一南校ビル Tel.03(3432)2927 ■定価514円 本体価格476円



『たなばでパーティー』池田 将之助 学校法人三光学園 神辺千鶴幼稚園